



TITLE:

<書評>小西賢吾著『四川チベットの宗教と地域社会 -- 宗教復興後を生きぬくボン教徒の人類学的研究』風響社、2015年、5,000円＋税、374頁

AUTHOR(S):

別所, 裕介

---

CITATION:

別所, 裕介. <書評>小西賢吾著『四川チベットの宗教と地域社会 -- 宗教復興後を生きぬくボン教徒の人類学的研究』風響社、2015年、5,000円＋税、374頁. コンタクト・ゾーン 2017, 9(2017): 435-442

ISSUE DATE:

2017-12-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228338>

RIGHT:

小西賢吾著

## 『四川チベットの宗教と地域社会 ——宗教復興後を生きぬくボン教徒の人類学的研究』

風響社、2015 年、5,000 円＋税、374 頁

別所裕介

本書は、現代中国の四川省北部（アムド地方）に位置するチベット人集落で、1980 年代以降に再生したボン教をめぐる宗教実践がいかなるメカニズムのもとで復興し、存続しているのかを、長期の住込み調査から得られた実証的な資料に基づいて検討したものである。

本書のフィールドデータは、著者が 2005 年から 2013 年の間、のべ 18 か月をかけて行った現地調査から収集されている。本書を構成する計 9 つの章のうち 5 つの章が、四川省北部の松潘県シャルコク谷で著者自身が参与したボン教儀礼の実践過程の描写に割かれているが、チベット本土で活動するボン教僧院の社会的機能についてここまで詳細なモノグラフが記述された例はほかになく、著者の緻密な観察眼によって、今を生きるボン教僧院の実態が余すところなく描き出されている。なお、本書は 2015 年に 2 つの学術団体（地域研究コンソーシアム、比較文明学会）から表彰され、賞を受けている。

評者は、本書の調査地域であるシャルコクから 600 キロほど北上した位置にある青海省のチベット仏教徒集落を対象にフィールド調査を続けてきた人類学者である。チベット仏教というドミナントな宗教勢力による村落社会の包摂を自明のこととしてきた評者にとって、本書で取り上げられる年中儀礼やゴンジョ（前行）、チョルテン（仏塔）の造営といった一連の宗教祭儀はなじみ深いものであると同時に、その記述の細部に宿る相違性によって、自らが自明としてきたチベット社会への認識が一面的なものに過ぎない、という気付きを改めて与えてくれるものであった。

ボン教は、チベットに仏教が伝来する以前から存在する宗教であり、その始原はゴータマ・ブッダが生まれたインドではなく、今日のイラン方面に求められるなど、仏教との差異化には常に意識が払われてきた。しかし本書でも触れられているとおり、11 世紀のユンドゥン・ボンの時代以降、チベット仏教（特にニンマ派）の思想的伝統と強固に結びつ

き、相互に影響が深まることで、教義総体としては仏教の影響が拭いがたく浸透している。このような差異化と近接化の2つのベクトルが作用した地域社会における複雑なボン教信仰の実態は、本書において、儀礼や物品をめぐる単にイディオム上の小さな相違（例：マティコル⇔マニコル）から、シャルコクが置かれた社会・歴史的な状況に起因する、より大きなレベルまで、振幅をもって展開されている。この意味で本書は、チベット社会を「仏教徒社会」として無前提に想起してしまいがちな（評者を含む）一般読者に、ボン教集落という周縁からのまなざしを強力に照射することで、現代チベットに対するありきたりで外在的な解釈を修正し、より多層的なものにしていくための確かな材料を提起してくれる。

以下では、前半において本書の内容をごく簡単に要約した上で、本書の議論が持つ意義を2つに分けて提示する。その上で、評者が読後に感じたいくつかの疑問点を指摘してみたい。なお、本書の章立ては以下のとおりとなっている。

まえがき

序 章

第Ⅰ部 シャルコクと「宗教」のかたち

第一章 シャルコクの人びと

第二章 シャルコクにおけるボン教の輪郭

第Ⅱ部 改革開放以降のボン教僧院

第三章 僧院の再建とその社会経済的基盤

第四章 現代を生きるボン教僧侶たち

第五章 年中儀礼が生み出す共同性

第Ⅲ部 再編される地域社会と宗教の役割

第六章 人びとを巻き込む宗教実践

第七章 チョルテンの建設が結びつけるもの

終 章

あとがき

参考文献

付録：用語・地名・人名解説

索引

序章は、本書が目指す現代世界の宗教と地域社会の結びつきを普遍化して捉えるための方法論を明確に示す優れたガイダンスとなっている。最初にグローバル化と伝統復興、宗教と世俗化論争をめぐる一般的なトピックを整理し、それを改革開放後の中国の実情と結びつける視座が提起されている。この作業を経た上で、現代中国辺境部の宗教組織を主題として取り上げる本書が特に重視するのは、僧院を「外部のネットワーク」と「土着の共同性」の結節点として捉えることであり、そのことを僧院内部に置かれた視点と、その求心力に巻き込まれる村落社会の側の視点から多面的に描き出すことである。本書ではこの

2つの視座が、僧院主体の活動構築（第Ⅱ部：第三章～第五章）と、それに巻き込まれつつ主体的な変容を経験する村人たち（第Ⅲ部：第六章～第七章）、という構図において具体的に明らかにされていく。

続く第一章では、調査地であるシャルコク地方の歴史と村落（S村、109世帯）の暮らしが概観される。漢族社会との境界地域に位置する調査地の村落が、清朝期から民国期に及ぶ期間（18世紀前半～20世紀前半）における「土司」と呼ばれる伝統政体の時代、1950年代の中国共産党による支配と集団化の時代、80年代以降の経済開放の時代を経て、生業と経済収入の多様化に伴う余剰所得の大幅増加へと発展してきたことを明らかにする。特に、観光地化に伴う可処分所得を得たことで村民の経済的地盤が新たに形成され、その一部が地域の中核僧院（S僧院）へと還流することで、S村を中心とする宗教実践の活性化が支えられる、という因果関係を示すための実証的な論拠が提示される。

第二章では、チベットの伝統宗教であり、中国共産党政府が認定する五大宗教のうち「仏教」と同じカテゴリーに括られているボン教の過去から現在にいたるまでの変容を概観し、その流れをシャルコクの地域社会変動の中に位置づけている。今日アムド地方に残存しているボン教はチベット仏教社会の周辺部で細々と営まれてきた少数派の宗教伝統であるが、またそれ故に、今日のグローバル化の状況のもとで中央チベットやインドの亡命チベット人社会におけるボン教教団の組織化に倣い、教義体系が急速に整備されてきた様うかがえる。

第三章では、政治的混乱によっていったんは閉鎖を余儀なくされたS僧院の復興・再生の半世紀が時系列で詳述される。シャルコクの地域社会を代表する名利としてのS僧院は、一方で中国国内の観光マーケットやグローバルなボン教教団総体としての集合化の流れに取り込まれながらも、S村とその周辺の地域社会独自のステータスを温存する基盤となっている。そのことは、歴代この地から輩出された高僧を回顧する信仰行為や、地域の聖山へ巡拝するなどの実践を通じて可視的に担保されている。また、本章の後半部ではライフストーリーの手法を通じて、文革期の政治的混乱にさらされた個々の僧侶たちが下した苦渋の決断と現在にまで尾を引くその帰結が躍動的な筆致で描かれている。

第四章では現代中国というマクロな社会背景の中で生きるシャルコクのボン教僧侶の類型が示されている。アク・ブンツォとそれ以外の一般僧侶の役割という対比の中で話が進んでいく。アク・ブンツォはゴンジョを主催する僧侶であり、高い身分を求めない謙虚さや、分け隔ての無い慈悲心などの徳目が優れて人々を惹きつけている。このアク・ブンツォというカリスマ的中心人物が頭角を現す上で、政治的混乱期を経験した古参の僧侶たちの知識を継承するという焦眉の課題や、地域を越えた僧院のネットワークといった背後要因が大きく作用していたことが明らかにされる。さらに、再建された僧院が著名な世界遺産「九寨溝」と隣接していたことによる観光地化とそれによる現金収入の増加、その後の僧院のあるべき姿をめぐる葛藤と観光地化への反発、その経過がむしろS村をはじめとする地域社会に向けた活動の充実へと舵を切る契機となったことが述べられる。

第五章では、「マティ・ドウチェン」と呼ばれるS僧院最大の年中儀礼を通じた僧侶組織の再構築に焦点が当てられる。僧院の管理組織や教育システムが現代の文脈にそった形

で再構築され、有力な高僧のもとで僧院の中核を担う若いエリート世代が育成される現状が克明に記されている。一方、個々の成員の動きをみると、学習や世俗社会との関わり方が多様である中で、能力にばらつきのある僧侶たちをお互いに結びつける結節点となるのは、僧院の一員としての具体的な役割や職掌の遂行であることが明らかにされる。

第六章では、チベットの宗教伝統において修行の入り口と見なされる「ゴンジョ」が集中的に取り上げられる。その過程は、各自の修行→マンテー→ゴンジョ→ボワ→聖山巡礼の順に、個々人の内面に閉じられた秘儀的なものから、より開かれた社会性の高いものへと遷移していく。ゴンジョのクライマックスは「カシャラ」と呼ばれる草を参加者の頭頂部に挿す行為であり、個々人がこれについて受け止めた身体的変容の経験が語られる。他方で、著者の目線はこの一連の儀式を動かす「裏方」へも注がれる。ゴンジョは雑多な参加者を含みこみつつ、段階的な儀礼が連続的に営まれていく場であり、その目的はコミュニティの厄払いと密接につながっている。他方で、その運営にはS僧院の僧侶たちが役割を分担し、中心的な参加者と周縁的な参加者の双方を方向づけていくことで、宗教経験の多様な濃淡をまとめあげていく過程でもあることが示される。

第七章では、村落を守るシンボルとしての「チョルテン」を再建するためにどのような人脈と求心力が発揮されたのかが検討される。前述したような観光地化に伴う人々の可処分所得の向上がチョルテン再建の経済的原動力であるが、その精神的なけん引の渦の中心にはあくまでもS僧院の高僧、なかんずくアク・ブンツォが発揮する求心力があり、チョルテン建設の物理的過程全般が、人々の間で希薄化しつつある村落の共同性を再確認させる契機につながっていることが指摘される。著者はチョルテンの内部に埋蔵される供物の多彩な構成を綿密に解析し、人々が興奮と熱狂の渦の中で自らにつながる供物を埋め込むことで、チョルテンがコミュニティの土地空間へ放出する霊的な守護力の受け手となろうとする主体的な意識を培っていることを検証する。

終章では、ここまでの一連の検討事例を、冒頭に提起された2つの視座に立ち戻って統合的に考察している。ひとつは、僧院社会の内部における宗教伝統の存続メカニズムであり、もうひとつは、地域社会を構成する人々の側から、彼らが宗教実践のどのような部分に惹きつけられ、そこへ主体的に巻き込まれていくのか、という動きの部分である。そして以下の2つの結論が導き出される。第一に、S村の僧院活動は、①地域住民の経済収入の向上、②マクロ・レベルのネットワーク機能、という潜在要因によって、社会主義による近代化、およびそれに続くグローバリゼーションの波の中で、数十年に及ぶ途絶から復興し、今日にいたるまで持続している。次に、S僧院のアク・ブンツォを中心とするカリスマ性を備えた高僧の手ずからの儀礼再興は、ボン教教団のグローバルな動きを上から押し付けることで進展したのではなく、むしろS僧院が立地するシャルコクの歴史的土着性に配慮することで進められた。それは、グローバル化によってコミュニティの境界が大きく揺らぐ中でも、過去からの地縁的な連続性を基底のところで確保しようとする地域社会のニーズを地盤として、儀礼に参加する個々の参加者の心性や身体に直接訴えかけることで軌道に乗っていったのである。著者は終章の最後で、伝統的な地域社会の紐帯は、モダニティによる急速なコミュニティの再編と人的流動化にさらされながらも、儀礼に参与



する人々の間に反復してリアリティを呼び戻し、共同性をいくたびも再構成することで宗教を存続させる基軸となる、という見通しを示す。現代チベットにおいて宗教を存続させる実質的な力の根幹にあるのは、僧侶個人のカリスマ的求心力、身体化された修行の遂行、それを通じた柔軟で可塑的な共同性の構築、という3つの連続した動きから織りなされると結論づけている。

以上のように本書は、「地域社会動態」と「グローバル化」を、僧院での定点観測によってつなぎ合わせるという独自の切り口から、現代中国の周縁部における伝統宗教の「静」と「動」を活写している。その第一の貢献は、確かな文献資料と緻密な参与観察データに基づき、ボン教僧院の成り立ちを、学僧とそれを支える裏方、つまり僧院全体の内部構造によって生み出される求心力と、そこに僧院を取り巻く世俗行為者が「巻き込まれていく」有機的なプロセスとして描き出したことである。

次に、結節点としてのS僧院をめぐる多様なアクターの不均質なつながりを、「感覚」という一見個別性が高く捉えにくいと考えられる要素を使って捉え返した点である。著者は、「心と身体に直接訴えかける要素」として、信徒たちの目の前にいるアク・ブンツォの安定した存在感や、より大きな年中行事への個々の身体変容を伴う参加経験を取り上げる。そこで繰り返される伝統祭儀の活性化には、「新しいボン」(ユンドウン・ボン)が作り出す現代的なボン教復興運動とのトランスナショナルな連携がひとつの大きな背景として垣間見えるが、他方でその活性化は、S僧院内のエリート階層や地域社会の人々が、シャルコクが置かれた独自の歴史や経済的背景を踏まえた土着性を織り込んでいく過程と密接に同期している。著者は、その複雑な過程を、宗教施設を手ずから復興し、それを持続させていこうとする個々の村人の身体レベルの感覚にまで降り立って記述することで、ボン教実践の地域性を視野に収めつつ、しかもその輪郭をモダニティの中でもたらされる「ヴァーチャルな共同性」(325頁：以下、本書からの引用頁は数字のみ記す)の中に置くことで、急速な社会変容の中で存続していく宗教運動の強靱さを活写している。

以上のように本書には、現代チベットの宗教と地域社会という枠組みを捉える上で重要な知見が数多く含まれている。評者のようにチベット研究に長らく携わっていても、本格的なボン教研究の成果を自らの調査地で見ている仏教徒の実践に引き付けて考えることは相当に困難である。それは、ボン教が独立した体系を持つ巨大な伝統のかたまりであり、にわかにはとりつくことのできない奥深さを秘めているからであるが、その点からも、本書が噛み砕いて伝えてくれるボン教信仰の実状に関する研究資料は高い参照価値を有している。

これに加えて、本書の隠れたもうひとつの価値として、付録と索引の充実度が挙げられる。総計で21頁の紙幅を持つ付録／索引には、四川チベット全域を網羅するボン教関連の用語・地名・人名解説が施されており、チベットの宗教体系の中でのボン教の位置づけに興味を持つ読者に対しても最適のインデックスとなっている。索引と付録がクロスインデックスになっている点も使い勝手を大幅に向上させている。

だが他方で、本書の記述に不十分な点が残らないわけではない。もっとも気になったことは、「チベットの宗教」という共通枠組みの中でのチベット仏教徒社会との横のつなが

りが描かれていないということである。著者は、第二章において「シャルコクは21世紀初頭にいたるまで仏教の影響をほとんど受けず、住民のほとんどがボン教徒である」(97)という簡潔な引用文によって、当該地をいったん「ボン教がドミナントな領域」として近接するチベット仏教徒地域から切り離し、これと外部のグローバルなボン教教団の動きに記述の焦点を絞り込むことで、四川チベットの宗教と地域社会の今日的な動態を支えるマクロとミクロの相関構図を描き出している。だが、このような操作によって、ボン教徒のコミュニティが息づくチベット高原東縁部のマクロ・リージョナルな地域社会の構図は捨象されてしまう。このことは、たとえば第四章で「かつて対立関係もはらんでいた仏教との関係」(164)として述べられる「(かつてボン教僧がゲルク派僧院で学ぶ際には)自分をカギユ派の僧侶だと偽って、ボンポであることは隠さないといけなかった」、だが今日では海外を中心とするボン教への正当な認知の向上によってそれが是正されている、という趣旨の一僧侶の述懐が持つ歴史政治的な含意を、浅い認識のレベルにとどめてしまう。

そもそも、現代中国の辺境に位置づけられるチベット高原東縁部の多民族ベルト地帯において宗教が復興し、持続していく総体的状況を示すためには、今日のような世界的な近代宗教概念の流布によって各宗教伝統が並列化される以前のチベット社会に存した仏教とボン教の間の大きな不均衡への言及を避けて通るべきではないだろう。それは一言でいえば、マジョリティである仏教徒の側からの、ボン教徒に対する「外道」カテゴリーのあてはめである。そしてこのような「外道」認識に基づく民衆レベルの差別感情は今日の本土チベット人の生活社会においてなおも根強く残存している。評者自身の経験に照らしても、学校教育を受けた現代の青年層に比べ、老壮年層が持つボン教徒への忌避感情は依然として根強い。ボン教徒村落との通婚は通常はありえないことであり、用事があって彼らの村を訪ねた際にも、共食などは可能であるが、その村で寝泊まりしたり、贈与された品物を自分の家へ持ち帰ったりすることには強い拒否反応を示す。これはボン教徒の側でも同様であり、評者が通う青海省の村落地域では、各地に点在するボン教徒コミュニティは幅広く分散した孤立的な立地環境にあるため、自らが極端な少数者集団であることを踏まえて控えめな行動をとり、相互のもののやりとりなどには総じて慎重である。

本書においてシャルコクを中心としたボン教徒社会の存続の力学を明らかにすることが関心の中軸であることはゆるぎなく、その意味で論著は成功している。また、そのローカルな力学の生成に外から作用するグローバルなボン教教団の組織化への目配りも、本書に通り一遍のモノグラフを超えるユニークな特性を加えている。だが、それが単にボン教徒社会にとって「正」の方向へ働くだけでなく、同一地域内のリージョナルな格差や、いったんは鎮められた宗教間の確執や差別感情をふたたび先祖返り的によみがえらせてしまう「負」の方向性をもはらみうることを考え合わせれば、ボン教徒の地域社会を取り巻くローカルとグローバルの合間にあるはずのマクロ・リージョナルな構造に、ある程度目配りすることはやはり必要ではなかっただろうか。特にシャルコクが位置する多民族の境界地域という立地条件からすれば、ボン教徒以外のチベット族と漢民族、チャン族などとの間の地方行政的な線引きの確定とマイノリティ行政、観光化などの文脈が、それぞれの地域社会に埋め込まれた保守的な差別感情や他集団に対する優越感をよみがえらせ、強化し

てしまうということがありえないとはいえない。現代のボン教を取り巻くこうした周辺情報も、本書では可能な限り盛り込まれるべきではなかったかと考える。

これと相まって、中国の領域統合との関係で現代チベットの政治状況の特徴づける統一戦線工作とボン教実践との関係も気にかかるところである。著者はS僧院が長征ルートと重なったことで「愛国的」という評価を勝ち得る可能性があったことに触れているが(127)、紅軍との接触という偶発的要素とは別に、この地域の多民族性に対する上位の政策決定が、チベット仏教集団に比べてボン教集団の側により好意的に働いてきたということはないのであろうか。たとえばS僧院で「文明学院」を開設する際、それは純粋に僧院内部の意思決定で完結する性質のものであったのか、あるいはそこに、ボン教を優遇してチベット仏教を抑制するという、上位の政策部門での配慮が働いた形跡はなかったのか。これまで、特に中央チベットのゲルク派政権との度重なる抗争であたかもスケープゴートであるかのように宗教弾圧の憂き目に遭ってきた歴史的背景を持つボン教集団であるが故に、共産中国の建国当初からその存在が知られる対チベット向け「離間工作」の影響を当初から受けてきた、という見方は念頭に置かれるべきである。当局が半世紀にわたって主導してきた民族宥和策や宗教活動上の優遇措置が、何らかの形で今日のボン教徒集団の社会的な配置に作用している、という観測は記述から排除すべきではないと考えるが、本書においてはそうした中央の辺境統治にかかわる宗教間関係の問題についてはほとんど触れられていない。たとえいま現在の信仰現場においてそのような上位レベルでの思惑や操作が表立って見えなかったとしても、少なくとも政治レベルで当局が抱くチベット族ボン教徒への警戒感は、いまだ国外に主導性を持つゲルク派などに向けられるそれと比定して相対的に低く、そのことがボン教実践の速やかな拡充にもある程度作用しているという、政治上の比較優位の見方は必要であろうと思われる。

以上で指摘した諸点については、著者自身も終章(327)で触れているように調査上の制約や、ボン教徒社会のモノグラフとしての切り取り方の問題もあり、さらにいえば、これまで圧倒的にチベット仏教社会の研究に注力してきたチベット研究の体制が内側に抱え込む限界と表裏一体の課題なのであって、必ずしも著者個人の力量に帰せられるべきものではない。本書がグローバル化する現代チベットにおけるボン教徒社会のモノグラフとして成功裏に記述を深めていることは疑いなく、四川チベット、およびチベット東縁部(アムド・カム)総体としての宗教社会構造の包括的な把握は、今後の横断的な地域研究の共同作業を通じて乗り越えられていかなければならない課題のひとつである。

こうした意味で、本稿を閉じるにあたって評者の希望を最後に一言述べさせていだきたい。それは、本書を早急に欧語圏で、英語もしくはフランス語版として出版してもらいたいということである。日本と比べて欧米社会には、ボン教の研究者のみならず、僧籍を持つネイティブ・ボン教徒の学究が多く、本書の成果が欧語圏で出版されることで彼ら自身にも大きな研究上のインパクトがもたらされることは確実である。なお、末筆であるがその際には、本書で散見された細かなミスについて修正をお願いしたい。たとえば第一章の脚注には3度にわたって「同美氏私信」という文字列が出てくるが、「同美」の名は参



照文献リストにも出てこないため、「あとがき」で謝辞が記される 331 頁まで読み進まないとな誰を指すのか解らず、読者にとっては不便な表記の仕方である。また、S 村の生業である半農半牧の記述についても、64 頁後ろから 4 行目の発音標記が 3 か所分抜け落ちているなど、いくつかの誤表記が見受けられる。こうした細かなミスを訂正した上で、早急に欧語圏での出版が待ち望まれる。

末尾にいたって余談になるが、評者は著者の 2007 年の論文「興奮を生み出し制御する」(『文化人類学』第 72 巻第 3 号, pp. 303-325) 以来、著者が集合的熱狂の中に流れる「秩序」を切り取る手法の鮮やかさに常々感嘆してきた者である。序章 19 頁にあるように、本書を貫く著者の関心は、学生時代から長期に亘って持続する「集団」と「きまりごと」との間のダイナミクスにあると感じる。著者が日本の祭り研究を事例として示した切り口が、本書では異文化との出会いを経てさらに強力に昇華され、読む者の足元に迫ってくるような感興を覚えた。このような一貫した関心が、今後さらに著者の感性をとぎすまし、新たな躍進へとつながっていくことを期待したい。